

子どもを真ん中に保育を考えるⅣ

—やっぱり子どもはおもしろい—

○企画・進行 佐藤寛子（お茶の水女子大学附属幼稚園） 指定討論者 村石理恵子（東京女子体育短期大学）

話題提供者 佐々木麻美・田村郁・渡辺満美（お茶の水女子大学附属幼稚園）

1. 企画趣旨

これまで、「面白さ」「遊び心」「ぐちゃぐちゃ」などをキーワードに、子どもたちの姿を思い浮かべ、語り合うことを通して、保育について考えてきた。子どもたちの、いつも真剣で一生懸命に生きている姿に触れると、保育者としての自身の関わりにおいて、「これで良かったのだろうか」と戸惑い悩むことは絶えない。それでも、「やっぱり子どもはおもしろい」と感じる瞬間があることで、ふと力が抜けて、もっと彼らを知りたいと思い、明日への希望がもてるような気持ちになる。「やっぱりおもしろい」と改めて感じるこの感覚は、保育者によって違うのだろうか。そして、どんな状況下で沸き起こってくるものなのだろう。現場で真摯に子どもと向き合い、真面目に考えながら、日々、楽しんで保育をしている保育者たちの語りから、考えを深めていきたい。（佐藤寛子）

2. 話題提供

「ラグビーのなかでの面白さ 4歳児」

11月、隣のクラスのA保育者が急ぎ足でビブスを持って園庭へ向かう姿が見え、「ラグビー！」という声が聞こえる。私も急いで園庭へ出ると、子どもたちはビブスを着て、ボールを取り合っていた。A保育者が必死に動き回り、遊びが途切れないようにして、私も今始まったこの遊びを一緒に支えることが必要だと思い、すぐにビブスを着て仲間に入った。これがすごい遊びで、とにかく1つのボールをみんなで追いかけて、取っては走り、また取り合って、決めた場所にゴールする、というもの。ボールを取り合うとどんどん人が重なり、ボールが動かない状況になってしまう。「スクラム！」「ライン！」などという言葉が飛び交い、意味がよくわからない子どもたちも、その言葉にふっと力が緩む。私たちも一緒に肩を組み、並んで、またボールを追いかけることを繰り返した。

そんなラグビーは、子どもたちの大好きな遊びになり、毎日のように「ラグビーやろう！」という声が上がった。登園すぐから子どもたちがビブスを運んで始める時があれば、ひと遊びしてからのもあり、始まりはいつも子どもたちからだった。最初は2、3人くらいから始まっても、年中児、年長児が混ざって、20人近くになることもある。その中に、B児がいた。B児は、1学期からどこか所在なく、周りを見て友達を真似て遊んでいるのだが、体はあまり動かず、友達との関わりでも戸惑う姿が見られた。本当にやりたいこと、彼が生き生きとすることがもっときつとあるはず…でもそれは何なのだろうか考える日々だった。そのB児が、ボールを取り合うのに子どもたちが重なり合ったり、時には押したりと

動きが激しいこの遊びに興味をもち、さらには朝一番に始めようとするのに、私はとても驚いた。私も劣勢のチームに入り、ボールを取り合い、なかなかボールを持ってない子どもにパスするなどして遊びを支えていたが、B児はみんなの動きについて走っているものの、なかなかボールを持てずにいた。B児にもゴールしてほしいと思いボールを取ると「Bくん！走って！」と大きな声で呼びかけながらパスした。B児は受け取ってすぐに、ポイッと近くにいる友達（相手チームであろうと）に渡した。とにかくボールを持っているとみんなが押し寄せてくるので、その前に手放すといった感じだ。その後、私はそばにいた、毎日参加しているがやはりボールを持ってないC児にパスしようすると、C児は、同じチームなのに、「いや〜」と笑いながら逃げてしまう。私は「待って〜！」とC児を笑いながら追いかけた。

B児やC児の表す姿は予想外だった。こんなにやりたい気持ちがあり楽しそうに参加しているのに、私が思っている以上にドキドキしながらだったのかとハッとし、遊びの盛り上がるリズムを支えている自分から、一瞬違う思考になる。そして「その子」をぐわんと感じた感覚が、保育後まで残る。子どもが表すことにはその子どもの思いが詰まっている。だから、その意味を考えたい。心の内を知りたい。「ぼくはこうなんだよ」があたりこちにある。（佐々木麻美）

「必死な日々のなかで 5歳児」

11月から年長組の担任になり、初めての担任、急遽の交代ということもあり、2学期末まで目の前のことで必死な毎日だった。そんななか、2学期終業式の日、クラスで「2学期楽しかったことなに？」と子どもたちに聞いた時、D児が「タケノコ！」と答えたことを思い出した。タケノコとりは1学期初めのことで、D児は年中組の頃から当時の年長児に混ざってやっていて、今年も率先してタケノコをとった。2学期には畑で野菜を育てたり、お山（園庭の高台）の柿や夏みかんをとったりと、食べることをたくさん経験し、D児も力を発揮していた。しかし、2学期の最後に思い浮かべたのはタケノコとりだったD児。それを聞いて、私は少し笑ってしまったが、D児にとって幼稚園で収穫して食べるということへの興味の始まりで、とても大きいことだったのだなと、とても納得した。D児の大人の感覚とは違う感覚がおもしろいと感じたが、それと同時に2学期のこれまで、子どもと関わる中で、子どものおもしろさに気づけていなかったのではと思った。

2学期特に悩んだのがE児との関わりである。様々なことに敏感で、人との関わりに荒さがあるE児。前の担

任と年少組の頃から徐々に関係を作り、少しずつ変わってきていたが、担任が代わり揺れる日々を過ごしていた。この頃、E児が凝っていたのが飛行機づくり。ある日の帰り、保護者に受け渡した後、E児が「飛行機のタイヤがちがう！」と言って、帰れなくなった。遊びの時間から帰りの集まりの間も作り続け、自分で切り替えて玄関に向かう列に並ぶ姿を見ていたので、「どうしたのだろう」と思った。保護者は説得して帰ろうとしていたが、E児が切り替えられそうになかったため、納得するまで作ろうと決めた。E児に「作るのに何が必要？」と聞くと、「いやだいやだ」と泣きながらも「ビニールテープ」、「白」と言葉を挟んだ。それを聞いて、私は急いで材料を取りに行き、一緒に作った。後から聞くと、前の担任との最終日に休んでいたE児は、この日に副園長から、担任がしばらく代わることを聞いたのだという。E児が帰った後、隣の組の担任が、泣きながらも意外と冷静に持ってきてほしいものを伝えるE児の姿を見ていて、「思わずくすくと笑いそうになっちゃった」と言ってくれた。私はその時は必死で、E児の様子に気づいていなかったが、思い返して一緒に笑った。担任が代わって気持ちが揺れるなかでも、何とか頼ろうとしているE児の想いに気づくことができて、また明日から頑張ろうと思えた。

子どもっておもしろい、そう思えるのは子どもと関わりながらも、どこか客観的に子どもを見られる時のように思う。私はそのゆとりがない場面も多いが、子どもの姿を振り返った時に、くすっと笑えて、子どもって“やっぱり”おもしろいと思うことがある。その時、思い詰めていたことも少し力が抜けて、また次の日の保育に向かうことができる。子どもってやっぱりおもしろい、そう思った時の自分の感覚を大事にしたい。（田村郁）

「保健室で過ごす子どもたち」

子どもたちは保育室や園庭の雰囲気や保健室に運んできてくれる。園庭でのドッチボールやリレー、ラグビーが白熱していると、けがの手当てでも「はやく、はやく」と急かされる。友だちと離れたくない時は、手当ては「今はしなくていい！」と泣かれそうになる。子どもたちの気持ちが、手当てをする私の気持ちを動かし、なるべくその子の「今」が途切れないようにと思い、手当てをする。通常、手当てには痛みの感情がともなう。「痛い」の一言は、周りで見ている子どもたちにも痛かった経験を思い起こさせ、「痛い」の感情でつながる。私は「痛い」感情を引き受け、「大丈夫」まで引き上げたいと思い、手当てをする。手当てが終わると周りの子どもたちが安心するのか「ほっ」とした空気になる。周りの子どもたちの「ほっ」としている空気が、手当てした子どもの気持ちを引き上げてくれていることに気づく。手当てはその繰り返しが、子どもたちが感情でつながり助け合っていることに面白さを感じる。

最近、保健室ではポケモンのモンスター作りが続いている。ポケモン作りに必要な材料を、ダンボールで作ったケースに入れ、それを押して保健室にやって来る年長児がいる。最初は、保健室のほんの少しのスペースでポケモン作りが始まった。作りたい気持ちに巻き込まれ、子どもたち同士の関わる姿に魅せられ、気付いたら、私も楽しくなっていた。そして、他の子どもたちも作るよ

うになっていた。子どもたちは作りながら、使っている材料を「貸してあげる」「貸してあげない」でもめたり、作ったものを満足そうに動かしながら「ここが変かも」「ここはうまくいった」など、互いの作品を見せ合ったりしている。異学年が一緒になると、年長児に年中児が材料を貸してもらえないことがあったり、年中児が「できない」と言うと、年長児に「うるさいなあ」と言われてしまうこともあったりする。そうかと思えば、丁寧に作り方を教えてもらっていることもある。年長児が作っているものや、ものづくりに向き合う姿をみて、年中児が尊敬のまなざしで見つめていることもある。

保健室の機能だけを追求していたら起こり得ない、子どもたちが関わり合う空間が生まれている。子どもたちが関わり合う場だからこそ、もめごともあり、笑ったり怒ったり、泣いたり感情を重ね合わせていく姿に気持ちが動かされる。気持ちが一つになったり、それぞれの感情が重なり合ったりする中で、悲しくなりそうな気持ちを感じ、空気を変えるような関わりをしてくれるようなひとがいる。そんな場面に出会うと、子どもたちのすごさを実感してしまう。

保育後、子どもたちに気持ちが動かされた出来事を担任や同僚と話す。話したことを振り返りながら、「私の気持ちが動かされて、面白く感じただけかな…」「ほんととは違う遊びに促してほしいかな？」と考えたりすることがある。出来事だけでなく、担任の思いを共有することは、話した出来事やその子の輪郭が少し浮かび上がるような感覚になり、明日の保育の面白さにつながる。「やっぱり子どもっておもしろいよね」と担任と共有できることが私の「おもしろい」につながっている。（渡辺満美）

3. 指定討論

“やっぱり”ということは、予想通りであり、想定内の話、子どもはおもしろいという基本的な共通理解のもと、保育の営みが行われているということである。子どものおもしろさは子どもを知らば知るほど深まるものであり、日々の保育は子どもの魅力を追求していく過程となる。どのようなことでおもしろいと感じるのか、保育者によって異なるようである。また同じ保育者でも変化があるのではないだろうか。それは何故だろう。

事例から、それぞれの保育者の感じるおもしろさが提供されている。ここでは、理解し援助した瞬間に理解の修正が必要になってそれがおもしろいと感じる事例、最中には感じる暇もないものの時間を経て俯瞰しておもしろいと感じる事例、子ども自身の危機的状況だからこそ体感でおもしろさを感じる事例が示されている。おもしろさを追求することは自らの保育観に向き合うことになる。

何故おもしろいのだろう。まるで笑いのツボのように、おもしろさのツボがあり、それを語り合うことが、“やっぱり子どもはおもしろい”、という思いになるだろう。そして、子どもにとって保育者は、場所や時間も含めて保育の営みの中で共に生きている存在である。時に自分を認め、受け入れ、励ましている存在だが、時にわからず屋で面倒くさく、張り合う相手にもなる。こんな大人もいるのだと多様な他者の存在に気づくきっかけになる。子どもにとっても、保育者はやっぱりおもしろい存在となるのである。

（村石理恵子）